

今月の題字

吉田仁貴さん

(みどり市大間々町)

246年前の大間々祇園祭の大幟を手染めで再現していただいた吉田旗染店の店主。今年の大間々祇園祭には7メートル『牛頭天王御祭礼』の大幟が見られると思います。

虹の架橋



395年目の大間々祇園大太鼓の寄進者は郷土の偉人沼田、世良田と並んで『上州三大祇園祭』と言われる大間々祇園祭りには、文政年間に寄進された大太鼓など大間々祇園の長い歴史を物語る宝物が次々に登場します。安政四年(一八五七)の大太鼓の寄進者の中に吉田孝三郎の名前が彫られています。吉田孝三郎(吉村屋幸兵衛)は、十七歳で大間々の二丁目糸商を始め、安政六年、横浜開港と同時に横浜に



後列左から四人目が吉田孝三郎

移り、またたく間に商才を発揮し、「横浜の三巨頭」と称される貿易商になりました。明治元年には売上げが百万両を超えていたという記録が残っています。明治政府は生糸貿易を発展させるために明治二年に横浜為替会社を設立し、吉田孝三郎が頭取に任命されました。さらに、翌年には大蔵省の金融制度視察団の一員として、伊藤博文らと共にアメリカ合衆国を訪問しています。帰国後は明治五年に設置された第二国立銀行の設立にも大株主として参画して活躍しました。明治十一年、孝三郎は吉村屋の営業権を渋沢喜作(渋沢栄一の従兄)に譲渡して引退隠居、孝三郎四十三歳の時でした。幕末から明治にかけて、日本を代表する商人として活躍した郷土の偉人が大間々祇園祭りの大太鼓を寄進したのは弱冠二十三歳の時でした。



小耳にはさんだ

いい話 (文責・菊) 《348》

じつとしていられない

阿蘇の大自然の中にある『風の丘阿蘇大野勝彦美術館』は、一万二千坪の敷地の中に建つ大野勝彦さん個人の美術館です。大野さんは三十五年前に農業機械に両手を挟まれ切断。以来、義手で絵や詩を書き、持ち前の明るさとやさしさで多くの人に勇気と感動を与え続けています。そんな大野さんの十一冊目の本『勝彦の無手勝流』という詩画集が出版されました。本の中で、八年前の熊本地震の時のことが書かれています。

「(あの時の地震で)本館は残ったものの、そこに通じる道、電気、水まで届かぬ陸の孤島となつてしまいました。そんな状況の中で、わずか一年後に再オープン。出来たのは、数えきれない人たちの支援、励まし、アドバイスがあったからでした。弁当持参で何度も来てくれた人、力仕事があるでしょうと仲間の男性を集めて来てくれた人。でもよく考えてみるとその多くの人たちも被災され、自分も大変な状況の中で風の丘まで来ていただいていたのです」

「(あの時の地震で)本館は残ったものの、そこに通じる道、電気、水まで届かぬ陸の孤島となつてしまいました。そんな状況の中で、わずか一年後に再オープン。出来たのは、数えきれない人たちの支援、励まし、アドバイスがあったからでした。弁当持参で何度も来てくれた人、力仕事があるでしょうと仲間の男性を集めて来てくれた人。でもよく考えてみるとその多くの人たちも被災され、自分も大変な状況の中で風の丘まで来ていただいていたのです」

日、御主人と娘さんとお母さんの分まで作業に汗を流してくれました。お母さんは車の助手席に正座をし、美術館の方を向いて両手を合わせて祈り続けていました。それを見た大野さんはその場に座り込み、手の代わりに二本の義手を合わせて『あ・り・が・と・う・ご・さ・い・ます』と何度も何度もつぶやいていたそうです。『勝彦の無手勝流』(税込三千円)は足利屋にも置いてあります。



無手勝流

梅雨晴れや千歩余分に万歩計「みどり市元氣プロジェクト」に参加しています。首から活動量計をさげて歩くと、毎日の歩数が記録され、歩数に応じてポイントがたまります。去年は「元氣アップ商品券」を五千円分もらいました。歩くことで健康になり、ご褒美に商品券がもらえてウォーキング仲間との会話も弾みます。毎日一万歩以上歩くと一年で北海道の宗谷岬から鹿児島島の佐多岬まで歩いたことになりました。梅雨の晴れ間、気持ちがいいので少し余分に歩きました。家の前を掃除する人、草むしりをする人：幸せな光景に出会いました。

世界一小さな 足利屋 トイレ美術館

今月の写真《348》

昭和の大間々祇園祭



靖ちゃん日記

令和六年七月十三日(土) 足利市立美術館で「生誕百年相田みつとを展」が始まった。長男、一人(みつと)さんのオーブンゲートは笑いを誘いながら、父、相田みつとをの魅力を紹介していた。一人さんとは、二十数年前、足利屋と足利のつなかりがきつかけで親しくなった。美術館へ行く前、法玄寺の相田家のお墓にお参りした。相田みつとさんの墓の隣に戦死した二人のお兄さんの墓があった。「みづと」の声を思い出した。みづとさんの声は、若くして死んだ二人の兄の声であり、死ぬまで二人の名を呼び続けた悲しい母の声であり、兄のことには一言も触れずに黙って死んでいったさびしい父の声だ。この詩を詠むたびに涙が流れた。相田みつとさんは不遇な時代も長かった。「金か人生の全てではないか 有れば便利、無いと不便です 便利の方がいいなあ」という作詞もあつた。多くの人が「そのみづとらしの声」として共感している。



虹の架橋 検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百四十九号は令和六年九月一日(日)発行予定です。

靖ちゃんの似顔絵提供：ひさかさん